

1－9節。大祭司などユダヤ教によって訴えられるパウロ

エルサレム神殿で捕えられたパウロが、ローマ市民権を持っていることを盾にローマ皇帝の裁判を受けたいと申し出たこと、更にはパウロを暗殺しようとする動きがあることが分かった千人隊長は「総督フェリクス」がいる「カイサリア」にパウロを護送した。

（ローマ総督の前の裁判は、ポンテオ・ピラトから裁判を受けた主イエスを思い起こす。）

フェリクスは、エルサレムからユダヤ教からの告発人たちが到着するのを待つ尋問の時を持つ。今日の所はそこから始まっている。パウロを訴えるために来たのは「大祭司アナニア」と「長老数名と弁護士テルティロ」であった。「長老数名」は最高法院の議員（22章30節）。

「テルティロ」という名は、ラテン語名であるがユダヤ人である。この人もパウロ同様ギリシア語を用いるユダヤ人であり、ローマ市民権を持ち、更にローマ法に詳しい人であった。またローマ式弁論術も学んだことを2－3節の彼の言葉が示している。

「ナザレ人の分派」という言い方は初めて。主イエスがナザレ出身なので、主イエスを信じ従う人々をこのように呼んだようである。なお。マタイ2章23節では「彼はナザレの人呼ばれる」という預言が成就したと記されている。

「世界中のユダヤ人の間に騒動を起こし」。パウロが安息日にユダヤ人の会堂に入り、主イエスを伝え、更に異邦人をもキリスト教信仰へ導き、異邦人とユダヤ人の区別を撤廃したことなどを、ユダヤ教側では犯罪と看做している。「神殿さえも汚そうとした」とは、21章27節以下のことであるが、これは事実無根である（13節、25：8節参照）

8節前にある短刀印（†）は、使徒言行録の最後のところを参照。

10－23節。パウロの弁明

テルティロの告訴に対しパウロは今回のエルサレムに上った後のこと語ることを通し答弁する（10節から13節）。13節にあるように、パウロは、自分を告発している件に関して何の証拠も出せないことを先ず確認する。（主イエスを訴えるに際し、総督ピラトの前に証拠を示さなかったように）。

14節から16節までは、パウロ自身も含め「この道」すなわち、ナザレの人で十字架上で死に復活され天に上られたイエスを主、キリストと信じるキリスト教のことを語る。「この希望は、この人たち自身も同じように抱いている」とは、最高法院の中で、ファリサイ派の人々のこと（23章6節以下参照）。

17節において、今回エルサレムに来た理由が語られる。それは「救援物資を渡すため」と「供え物を献げるため」（恐らく五旬祭の供え物、20章6節にある「除酵祭」《=過越祭》を過ぎてフィリピを出発しているので）

19 節にある「アジア州」は主にエフェソを中心としたところ。21 節は、23 章 6 節においてパウロが語った言葉。「死者の復活」についての詳細をパウロはコリントの信徒への手紙一 15 章において書き記している。

パウロは、23 章 6 節以下や今日のところ、更には上記のコリントの手紙などからも分かるように、「復活信仰」を自分自身の中心信仰にしている。それはパウロの回心、つまり 9 章 1 節以下に記されているように、彼自身が復活の主イエスに出会った経験からである。

22-23 節。フェリクスはキリスト教についてかなりの知識を持っていたよう。ユダヤの最高法院側の告訴とパウロの言い分を聞いた彼は、裁判の判決を「千人隊長リシア」がエルサレムから自分たちがいるカイサリアまで来るのを待ち、彼の話も聞いて判決を下すと言う。そしてパウロに、監禁はするが、ある程度の自由を与え、友人たち（カイサリアには福音宣教者フィリピはじめキリスト者が多数住んでいた。21 節以下参照。パウロの同伴者であるテモテやルカなども）と面会できるようにもした。

24-27 節。

パウロは結果的にこのカイサリアで 2 年の監禁生活を送ることになる。フェリクスの妻がユダヤ人であることがここに記されている。彼自身、パウロを呼び出し「キリスト・イエスへの信仰について話を聞いた」が、あらゆる信仰の話から「正義や節制や来るべき裁きについて」恐怖をおぼえ、それ以上は聞こうとしなかった。他の信仰の言葉ではなく、上記のことで恐れをおぼえたのは、政治家として、また一個人として、上記のことが恐ろしくなるほどの生活をしたことが分かる。もっと言えば、彼自身は不義や不節制、そして裁かれるような生活をしていて常にそれが心のどこかでここままではいけない、という思いがあったのだと思われる。

フェリクスは、「パウロから金をもらおうとする下心もあった」。故に、パウロを「度々呼び出して話し合って」いても、彼自身が本当にイエス・キリストを信じようとする心はさらさらなかったことが分かる。気持ちがなければ、あるいは違う心を持っていれば、パウロの信仰の言葉も通じない。主イエスが言われているように「耳があっても聞こえず、目が合っても見えない」のである。